九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

文脈情報の利用とその種類がアイロニー理解に及ぼす影響 : 肯定表現アイロニーと否定表現アイロニーの対比を通して

西村, 佐彩子
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/15683

出版情報：九州大学心理学研究. 6, pp.69-76, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2005, Vol.6, 69-76

文脈情報の利用とその種類がアイロニー理解に及ぼす影響[1)]

―肯定表現アイロニーと否定表現アイロニーの対比を通して―

西村佐彩子[2)]　九州大学大学院人間環境学府

The effects of the utilization of contextual information and its kinds on irony understanding
―Comparing positive irony and negative irony―

Sayako Nishimura (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Irony is understood by utilizing contextual information, but the relation between the different kinds of contextual information and their effects has not been examined thoroughly. This study proposed a model from the Relevance Theory view that the utilization of contextual information promotes the understanding of irony. Three kinds of contextual information, that is, positive norm, the explicit preceding utterance of the hearer, and controllability of the hearer, were studied to examine their effects on the appropriateness and attitudes implicit in the understanding of irony. Thirty-one college women were asked to respond to a questionnaire which included the presentation of the story. The results showed that the contextual information types of explicit preceding the utterance and controllability specifically promoted the understanding of negative attitudes. These are types of contextual information which are concerned with the responsibility of the hearer. Thus the hearer becomes the victim of irony, and negative attitudes are emphasized. These effects were salient in positive irony, which implicates negative attitudes. In order to clarify the way contextual information is used in the understanding of irony, it is necessary to investigate the different kinds and features of contextual information.

Keywords: irony, contextual information, responsibility of hearer, Relevance Theory

言葉は最も有効なコミュニケーションの手段であるが，我々が日常行う会話には，非字義的な表現が多く見られる。このような表現には，文字通りの意味だけでなくその他の意図が含まれているため，話し手の意図と聞き手の理解が一致することもあれば，ずれる可能性もある。人は何を手がかりに言葉の意図を読み取り，理解するのだろうか。文字通りの意味の裏に異なる態度を伝達するアイロニー（irony）は，さまざまな態度を感じ取れる非字義的言語の代表例である。その受け取り方がどのような条件で左右されるかについての基礎的知見を示すことは，コミュニケーション場面における言葉のもつ働きを知る上でも有用であろう。本論文は，話し手の意図を聞き手が文脈から読み取った情報をもとに理解するという関連性理論（Relevance theory：Sperber & Wilson, 1986）の観点に立ち論を進める。

アイロニーは一見事実に反する表現を行うことによって真意をほのめかす表現である。Grice（1975）に代表される従来の語用論では，アイロニーを反事実表現を用いた質の公準（maxim of quality）の違反の例としている。すなわちアイロニーの話し手[3)]の発話は話し手の信念や事実と異なることが明らかであることから，字義的な意味と逆の意味が会話の含意として理解されると説明した。

それに対して関連性理論では公準の違反という概念を用いることなく，アイロニーは“先行する期待にエコー的言及（echoic mention）[4)]を行うことで，非難などの話し手の態度を伝達する（Sperber, 1984）”表現であると主張している。たとえば，台風が吹き荒れている状況

---

1) 本研究は，1998年度神戸女学院大学人間科学部に提出した卒業論文の一部に改定を加えたものである。また本研究の内容は，日本心理学会第62回大会において発表を行った。
2) 卒業論文作成にあたりご指導をいただきました神戸女学院大学山祐嗣先生，ならびに本論文作成にあたりご示唆をいただきました九州大学北山修先生，針塚進先生に厚く感謝申し上げます。また有益なコメントをくださった皆様にも御礼申し上げます。
3) 以降アイロニーの発話者を話し手，アイロニー発話が向けられる対象を聞き手と表記する。
4) Sperber & Wilson はアイロニーがエコー的言及の例であるという説明を，言及理論（mention theory）として位置づけている（Sperber & Wilson, 1981）。後に彼らは言及を解釈（interpretation）というより一般的概念に修正することで，以前使用されたものと同じ表現をそのまま言及する直接的言及のみならず，命題内容の類似した表現も含む間接的言及までを包括して説明した（Sperber & Wilson, 1986；Wilson & Sperber, 1992）。しかし先行研究の多く（西谷，1996；内海，1997）は，解釈という言葉の不明瞭さおよび基本的主張点は一致していることから，言及という用語に統一して用いている。

（否定的場面）での「いい天気だね」という肯定表現を用いた発話はアイロニーになる。これは一般的に共有されている望ましい天気という肯定的期待を繰り返すことで，否定的現状と期待のずれを指摘している。すなわち“エコーされた意見から自分を切り離すことによって，話し手はその意見をもっていないことを示す（Blakemore, 1992）”のである。つまり話し手は，肯定的期待という意見を“文脈情報として利用[5]”しながら，否定的現状とのずれを指摘することで態度を伝達していると言い換えることが可能だろう。そして聞き手は，“話し手が利用した文脈情報を利用”することで話し手の意図を理解するのである。先述の例では，晴天が望ましいという肯定的規範や，ある場合にはアイロニーに先行する晴天を予測する他者の発話が文脈情報となり得る。

アイロニーが単なる反事実表現ではなく，文脈を利用して理解されることは実証研究でも支持されている（Jorgensen, Miller, & Sperber, 1984；Kreuz & Glucksberg, 1989；Kumon-Nakamura, Glucksberg, & Brown, 1995；西谷，1996）[6]。しかしこれらの先行研究では，聞き手が結果を予測する（そしてその予測が失敗する）明示的先行発話に文脈情報が限定されていた。文化的願望や規範（Wilson & Sperber, 1992）など，現状とのずれを指摘できる文脈情報は他にも想定できるが，その種類と理解態度効果の違いへの影響については検討されていない。そこで本論文ではアイロニーの犠牲者（victim）と文脈情報の関係という視点から，関連性理論に基づいたアイロニー理解過程に示唆を与えることを試みる。

アイロニーが伝達する主要な態度は嫌味のような否定的態度であるが，これはアイロニーに犠牲者が存在することで強くなると考えられる。犠牲者とはアイロニー発話の文脈情報として利用される先行発話や意見の主体者であり，話し手の態度――多くの場合否定的な――が向けられる対象者である。犠牲者に影響する文脈情報にはどのような特徴があるだろうか。「いい天気だね」というアイロニー発話が天気予報（や聞き手の予測）を反復する時には犠牲者が存在するが，実現しなかった希望を反復する場合は犠牲者が存在しない例である（Jorgensen et al., 1984）。後者のように文脈情報が一般的規範しかない場合は，かなわなかった期待への失望にとどまるだろう。しかし前者の場合は先行発話の主体者の予測の失敗という聞き手側に原因，すなわち“責任”が生じてくる。明示的先行発話は，アイロニー発話がはっきりした犠牲者をもつ言及のタイプの1つと説明されている（Sperber & Wilson, 1981；Kreuz & Glucksberg, 1989）。しかし犠牲者の存在と関連する文脈情報はこのタイプに限らないだろう。アイロニーの発話状況に関する文脈についてはどうだろうか。アイロニーの対象となる結果状況が聞き手の能力によって変更可能な，すなわち統制可能な状況（散らかった部屋に対する「きれいな部屋だね」というアイロニー）と，聞き手の能力ではどうしようもない統制不可能な状況（悪天候に対する「いい天気だね」というアイロニー）がある。前者の場合は，きれいな部屋を予測する先行発話の有無に関わらず聞き手に“責任”が生じる状況となるため，常に聞き手がアイロニーの犠牲者となる。このように聞き手が関与して責任が生じることで，聞き手がアイロニーの犠牲者となることが予測できる。すなわち，“聞き手の明示的先行発話”および“聞き手の統制可能性”の2要因という，聞き手が関与する文脈情報を利用することが，否定的態度を強めるために必要であると考えられる。先行研究（Kreuz & Glucksberg, 1989）では聞き手の統制可能性要因は統制されておらず，結果が交絡していた問題点が指摘できる。関連性理論におけるこれまでのアイロニーについての議論では，様々なタイプのアイロニーを統一した理解の仕組みで説明できるか否かの検証に焦点が当てられてきており，アイロニーが文脈情報を利用して理解される点については説明をしているが，利用する文脈情報の種類の細分化が理解に及ぼす効果については重視してこなかった。しかし上記で述べたようにどの文脈情報を利用したかは，アイロニーの犠牲者や否定的態度の強さと関連してくることが予測されるため，本論文では文脈情報の種類を考慮して検討を行う。

ところで，アイロニーには否定表現（一般的に望ましくない内容を表す表現）に比べて肯定表現（一般的に望ましい内容を表す表現）の方が多いという非対称性が存在する。Grice（1975）はこの点について説明できないが，関連性理論では以下の予測が可能である。存在している期待や規範は肯定的な内容のものがほとんどである。たとえば「いい天気だね」という肯定表現は，晴天を予測する先行発話がある場合はもちろん，それがなくても晴天の方が好ましいという一般的な期待や規範を文脈情報として利用できるためアイロニーになりやすい。一方「ひどい天気だね」という否定表現の場合は，悪天候の方が良いという否定的規範が存在しないためアイロニーとして知覚されにくいのである。否定表現がアイロニー

[5] 本論文ではアイロニー発話が言及する文脈情報の種類に焦点をあてる目的から，言及を，“文脈情報の利用”というより一般的な用語に置き換えた。アイロニー理解構造についての基本的主張点は言及理論と異なるところはない。“文脈情報”は，アイロニー発話がエコー的に言及できる，前提となる意見（期待や規範，先行発話など）の意味で使用する。

[6] Kreuz & Glucksberg（1989）は反復想起理論（echoic reminder theory），Kumon-Nakamura, Glucksberg & Brown（1995）は言及ふり理論（Allusional pretense theory）を提唱し，言及理論に批判，修正を提案しているが，アイロニーが単なる反事実表現でなく言及であるという視点は共通しており，言及という概念はアイロニーを説明する上で重要な役割を担っていると考えられる。

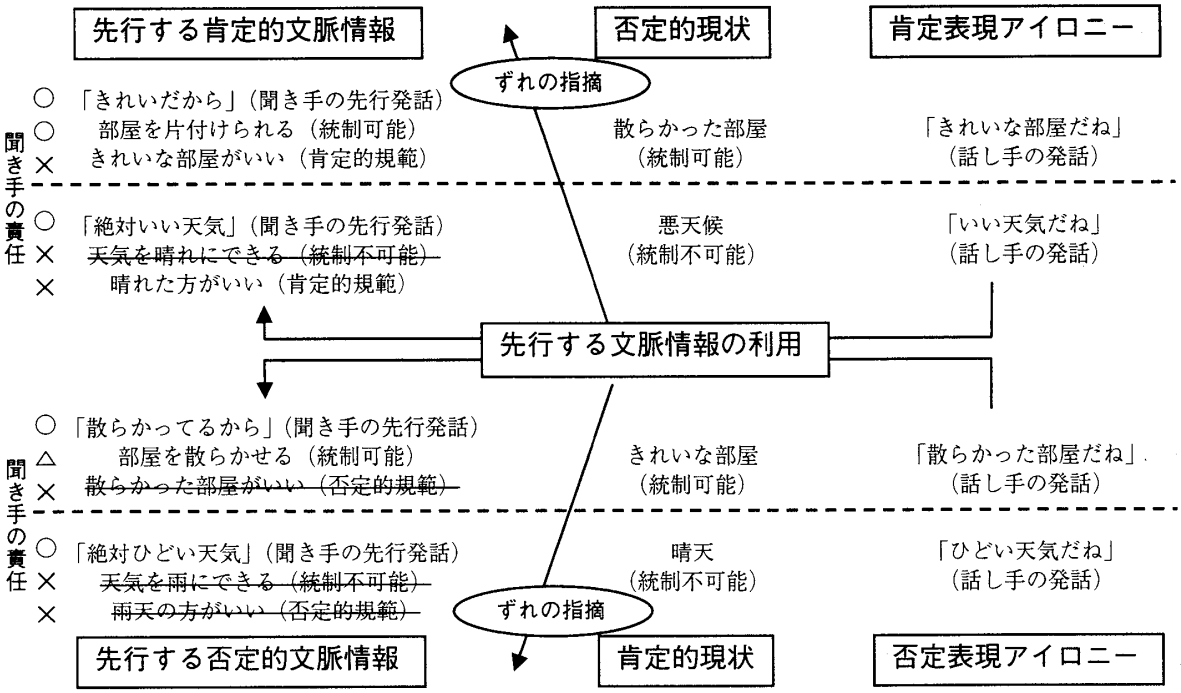

Fig.1　アイロニーの発話構造

となるためには，悪天候の予測発話がありそれが失敗するといった，利用可能な明示的文脈情報が必要になってくる。すなわち，聞き手の明示的先行発話を文脈情報として利用できる場合には，否定表現もアイロニーとして理解されるという予測が成り立つ。

Kreuz & Glucksberg（1989）はこの予測に従い，アイロニーの非対称性を検討する実験を行った。その結果，発話の適切さでのみ予測が支持されたが，嫌味（sarcasm）の程度は肯定表現の方が高く，明示的先行発話の重要性の予測は支持されなかった。この非対称性はどのような点を反映しているのだろうか。肯定表現は肯定的な期待の失敗への非難であるのに対して，否定表現は失敗状況の期待に対して成功した状況であり，非難する外観のもとで賞賛を与えるような特別な状況になる（Jorgensen et al., 1984）。このように同じアイロニーでも肯定表現と否定表現では含意される態度の特徴に違いがあることが推測できる。アイロニーは非難などの否定的な含意が中心となるが，それだけではなく，冗談やユーモアなどの楽観的な含意も存在する（西谷，1993）。そのためアイロニーとして適切であると聞き手が理解できる場合でも，その含意内容の種類と程度の知覚には差があると考えられる。アイロニー理解の指標として，“アイロニーとしての適切性”と“含意態度の種類と強さ”の両面から検討していく必要があるだろう。

以上に述べてきた，アイロニー発話における文脈情報の利用の構造を Fig.1 に示す。現状とのずれを指摘するために，利用できる文脈情報のいずれかが存在する場合，発話がアイロニーとして適切になると予測できる。さらには存在する文脈情報に聞き手の責任性に関わるものが含まれる場合，聞き手が犠牲者となりアイロニー発話に否定的態度の含意が強くなると予測できる。

本論文の目的は，文脈情報を利用することでアイロニー理解が促進されることについてのモデルを提案し，それを実証的に検証することにある。その際，“肯定的規範”の有無，“聞き手の明示的先行発話”の有無という先行研究で用いられている文脈情報に，新たに“聞き手の統制可能性”の有無を加えた３要因の文脈情報をとりあげる。

利用できる文脈情報が多いほどアイロニーらしい表現となることが予測できるが，さらに仮説として以下の３つを想定する。

（１－a）聞き手の責任性が生じる文脈情報（明示的先行発話，統制可能性）を利用した場合，聞き手がアイロニーの犠牲者となるため，アイロニーに否定的態度を感じやすくなる。すなわちこの２つの文脈情報のいずれも利用できない（予測や能力の失敗という責任がない）条件のみ，聞き手が犠牲者にならない（失望の表現にとどまる）ため，否定的態度評定が低くなるという交互作用が予測できる。

（１－b）肯定表現アイロニーの方が現状が否定的であ

るため，否定的態度を伝達しやすい。そのため，犠牲者にまつわる（1－a）の予測は肯定表現アイロニーの方によりあてはまる。

（2）否定表現アイロニーも，利用できる文脈情報がある場合はアイロニーとして適切である。その際結果状況は肯定的であるため統制可能性の文脈情報は肯定表現アイロニーほどには影響せず，否定的態度評定には，明示的先行発話の（予測が失敗する）文脈情報が聞き手の期待とのずれを指摘する要因として重要になってくる。

方　法

被験者　女子大学生31名。

実験計画　2（アイロニー発話：肯定表現，否定表現）[7]×2（聞き手の明示的先行発話：あり，なし）×2（聞き手の統制可能性：可能，不可能）の被験者内要因計画。

予備調査　実験で使用する刺激文作成のための予備調査を行った。存在する規範のほとんどは肯定的な内容のものであり，一般的に好ましいと考えられる。そこで各反対状況への期待が肯定的と否定的にわかれる題材を選択するために予備調査を行った。肯定的と否定的にわかれることが予測される26対の状況文（例：天気が良い・天気が悪い）を用意し，（1）個人的にはどちらの方が好ましいと思うか，（2）一般的にはどちらの方が好ましいと考えられていると思うか，のそれぞれについて女子大学生9人に5件法で評定させた。なお設問（1）は，規範の評定に個人的な価値観の混在を除くために設定したフィラーであった。各項目ごとに，設問（2）で評定された得点とどちらともいえないにあたる3点との比較のt検定を行った。その結果肯定的内容文の方に5％の危険率で有意に高かった24項目のうちから，聞き手に統制可能な4状況（部屋・試験・料理・出席），統制不可能な4状況（天気・道路・映画・授業）の計8状況を選択して本実験の刺激文作成のための材料として用いた。

刺激文　予備調査で選択した8対の状況を用いて，女子大学生が経験可能な内容である8対のアイロニー発話を含むストーリーを作成した（付録参照）。それぞれのストーリーは以下の構成によって成立していた。

（1）2人の登場人物（アイロニーの聞き手・A子とアイロニーの話し手・B美）および先行する状況の紹介。

（2）アイロニーの聞き手（A子）の結果を予測する明示的先行発話。

（3）アイロニーの聞き手（A子）の予測発話に反した結果となる状況。

（4）アイロニーの話し手（B美）の，一見事実に反する（文脈情報を利用している）アイロニー発話。

（5）アイロニーの聞き手（A子）の「それって皮肉？」という発話。

なお，明示的先行発話なし条件は，（2）が削除されたストーリーを用いた。

評定項目　それぞれのストーリーごとに，（1）「それって皮肉？」という発話は会話の流れとして自然か（適切性評定）[8]，（2）アイロニー発話はどういう意図をもって発話されたと思うか（態度評定），について尋ねる質問文が用意された。

（1）の評定項目は，皮肉としての適切性を確認するために用意された。被験者が「それって皮肉？」という発話を会話の流れとして自然であると判断するということは，すなわち聞き手がアイロニーを理解したと被験者が判断した場合である。評定対象がアイロニー発話自体ではなく，「それって皮肉？」という発話であるため，アイロニー発話の皮肉の強さではなく，発話としての適切性の程度が評定されると考えられる。

（2）の設問では，嫌味である，冗談である，軽蔑している，の3種類の評定項目が用意された。嫌味性評定は，嫌味はアイロニーが伝達する中心的態度であると考えられるため用意された。冗談性評定は，アイロニーには非難などの否定的含意と冗談やユーモアなどの楽観的含意が存在する（西谷，1993）ことから，楽観的態度を測定するために用意された。軽蔑性評定は，アイロニーは軽蔑的態度を伝達する（Sperber, 1984）という点から，嫌味よりもより強い否定的態度を測定するために用意した。

なおこれらの評定に用いる，皮肉・嫌味・冗談・軽蔑のそれぞれに含まれる意味合いを確認するため，女子大学生47名を対象に各評定語について，1. 非常に否定的～7. 非常に肯定的の7件法で評定を求めた。平均値（*SD*）は，皮肉2.87(1.15)，嫌味2.33(1.10)，冗談5.41(1.09)，軽蔑1.67(1.06)であった。一要因分散分析を行った結果主効果が有意であり（$F(3,135)=119.83$, $p<.01$），多重比較の結果すべての項目得点間に有意差がみられた。

手続き　実験は小集団で行った。被験者には1ページに1話ずつ，計8種類の話から成る冊子が配布され，各条件1話ずつ，計8条件のストーリーについて評定を行った。各条件ごとに1種類ずつのストーリーがあてはまるように，さらに各条件の提示順序についても冊子ごとにカウンターバランスを行った。被験者は8種類のストー

---

[7] 肯定表現の場合は常に肯定的規範が文脈情報として利用できるが，否定表現の場合は文脈情報として利用できる否定的規範が存在しない。アイロニー発話：肯定表現・否定表現条件は，文脈情報：肯定的規範あり・なし条件とも言い換えられる。

[8] コードモデル（code model）と異なり，関連性理論では言葉の理解は聞き手の推論によるため，話し手の意図と聞き手の理解にずれが生じることも想定している。「それって皮肉？」という聞き手の発話は，話し手の皮肉という意図を確認している発話である。この項目への評定は，聞き手が判断した話し手の発話の皮肉としての適切性の指標になると考えられる。

Table 1
各文脈情報要因におけるアイロニー発話への評定の平均値（標準偏差）

		肯定表現		否定表現	
		先行発話あり	先行発話なし	先行発話あり	先行発話なし
適切性	統制可能	5.23 (1.83)	5.13 (2.03)	3.77 (2.03)	2.70 (2.02)
	統制不可能	4.70 (1.76)	3.27 (1.89)	3.93 (1.96)	2.20 (1.67)
嫌味性	統制可能	5.40 (1.43)	5.37 (1.81)	4.20 (2.14)	3.83 (2.08)
	統制不可能	5.07 (1.84)	4.37 (1.77)	3.93 (1.72)	2.20 (1.56)
冗談性	統制可能	4.73 (1.80)	5.10 (1.67)	5.10 (1.71)	5.33 (2.01)
	統制不可能	4.03 (1.87)	4.67 (2.19)	4.73 (2.15)	5.47 (1.98)
軽蔑性	統制可能	3.43 (1.77)	3.73 (1.76)	2.93 (1.89)	2.13 (1.81)
	統制不可能	3.57 (1.74)	2.53 (1.76)	2.30 (1.56)	1.73 (1.44)

注）肯定表現は肯定的規範文脈情報あり，否定表現は規範文脈情報なしを表す．

リーに対して，（1）1．不自然である～7．自然である，（2）1．全くそう思わない～7．全くそう思う，のそれぞれ7件法で評定を行った。

結果と考察

適切性評定では不自然であるを1点，自然であるを7点とし，態度評定では全くそう思わないを1点，全くそう思うを7点として分析を行った。アイロニー発話状況の条件ごとにおける各評定項目の平均値をTable 1に示した。なお欠損値のあった被験者1名はリスト単位で除外した。

評定項目ごとに，2（アイロニー発話：肯定表現，否定表現）×2（聞き手の明示的先行発話：あり，なし）×2（聞き手の統制可能性：可能，不可能）の3要因分散分析を行った。評定項目ごとの統計結果を以下に示す。

適切性評定・嫌味性評定　アイロニーに含意される態度は1つではないため，アイロニーとしての適切性と嫌味の程度は必ずしも一致しないと考えられるが，適切性と嫌味性の検定結果はすべて同じ傾向を示した。これには，嫌味性はアイロニーに含意される最も中心的態度であるため，同じ傾向を示しやすかった可能性が考えられる。皮肉と嫌味の否定的意味合いに有意差はみられるものの，どちらも否定的意味合いが強く，聞き手の「それって皮肉？」という発話は話し手がもつ否定的態度の知覚を内包しているかもしれない。結果については，含意内容に否定的態度を含む皮肉の適切性として並列して論じる。

アイロニー発話，明示的先行発話，統制可能性のすべての要因で主効果が有意であり（適切性：$F(1,29)=27.99$, $p<.01$；$F(1,29)=26.15$, $p<.01$；$F(1,29)=9.97$, $p<.01$，嫌味性：$F(1,29)=36.55$, $p<.01$；$F(1,29)=10.98$, $p<.01$；$F(1,29)=13.23$, $p<.01$），肯定表現，明示的先行発話がある，統制可能な状況で，皮肉の発話の適切性が高かった。さらに明示的先行発話と統制可能性の交互作用が有意であった（$F(1,29)=4.89$, $p<.05$；$F(1,29)=6.61$, $p<.05$）。下位検定の結果，統制可能条件では明示的先行発話の単純主効果はみられなかったが（$F(1,58)=0.17$, *ns*；$F(1,58)=0.53$, *ns*），統制不可能条件では明示的先行発話の単純主効果がみられた（$F(1,58)=7.29$, $p<.01$；$F(1,58)=9.52$, $p<.01$）。すなわち，現状が聞き手に統制可能な場合は明示的先行発話の有無によって適切性に有意な差はみられないが，統制不可能な場合には明示的先行発話が存在することでアイロニー発話を皮肉として適切な発話として知覚することが示された。また明示的先行発話あり条件では統制可能性の単純主効果はみられなかったが（$F(1,58)=1.74$, *ns*；$F(1,58)=0.38$, *ns*），明示的先行発話なし条件では単純主効果がみられた（$F(1,58)=12.79$, $p<.01$；$F(1,58)=9.06$, $p<.01$）。すなわち明示的先行発話がある場合は現状が聞き手に統制可能か否かによって有意差はみられないが，明示的先行発話がない場合は現状が聞き手に統制可能であることでアイロニー発話が適切であると知覚されることが示された。

これらの結果は，肯定的規範，明示的先行発話，統制可能性という文脈情報が存在することで，皮肉として適切になるということを示しており，利用できる文脈情報の存在がアイロニーの適切性を促進するという予測に沿っている。また明示的先行発話と統制可能性の交互作用がみられ，この2つの文脈情報のうち少なくともどちらかを利用することが皮肉の知覚に必要であることが示された（仮説1－aを支持した）。だがアイロニーとしての適切性という点から考えると，肯定表現はその時点で肯

定的規範を利用できるためアイロニーとしての条件を満たすと予測できる。一方否定表現は否定的規範が存在しないため，残りの2つの文脈情報のうち最低1つが皮肉の条件を満たすためには必要になってくる。しかしアイロニー発話要因の交互作用はみられず，要因による傾向の違いは支持されなかった。Sperber & Wilson (1981) は文脈情報について，規範などを暗黙的先行，先行発話のようなできごとを明示的先行としている。明示的な先行はより明確な文脈情報として提示されるため聞き手に知覚されやすいと考えられる。明示的先行発話や統制可能性という聞き手の責任の所在を強調する文脈情報は，一般的に浮かぶ規範のような暗黙的先行に比べて，皮肉への影響が強い文脈情報であると考えられる。そのため肯定的規範の影響が表れにくかったのではないか。

冗談性評定　アイロニー発話と明示的先行発話の主効果のみ有意であり ($F(1,29)=6.52$, $p<.05$；$F(1,29)=6.31$, $p<.05$)，否定表現，明示的先行発話がない条件で冗談性が高くなった。この結果は，否定表現アイロニーが発話される状況は肯定的であるため，肯定的な態度を伝達することが多いことを反映しているかもしれない。また冗談といった楽観的側面には，今回とりあげた責任に関与する文脈情報が抑制的に働きかける可能性もある。アイロニーとしての適切性と，そこに含意される楽観的態度は必ずしも一致せず，冗談性と文脈情報の関連については，今後さらなる検討が必要であろう。

軽蔑性評定　アイロニー発話，明示的先行発話，統制可能性のすべての要因で主効果が有意であり，文脈情報がある方がアイロニー発話の軽蔑性が高かった ($F(1,29)=27.06$, $p<.01$；$F(1,29)=7.34$, $p<.05$；$F(1,29)=4.85$, $p<.05$)。さらにアイロニー発話，明示的先行発話，統制可能性の2次の交互作用が有意であった ($F(1,29)=5.43$, $p<.05$)。下位検定の結果，肯定表現条件において明示的先行発話と統制可能性の1次の単純交互作用がみられた ($F(1,29)=7.13$, $p<.05$)。そこで肯定表現条件を対象にさらに下位検定を行った。その結果，明示的先行発話では明示的先行発話なし条件でのみ統制可能性の単純単純主効果がみられ，統制可能条件の方が軽蔑性が高かった ($F(1,58)=7.15$, $p<.05$)。また統制可能性では統制不可能条件でのみ明示的先行発話の単純単純主効果がみられ，先行発話がある方が軽蔑性が高かった ($F(1,58)=8.97$, $p<.01$)。また，否定表現条件においては，明示的先行発話と統制可能性それぞれの単純主効果がみられた ($F(1,58)=8.46$, $p<.01$；$F(1,58)=4.84$, $p<.05$)。

軽蔑性評定では，適切性・嫌味性評定ではみられなかったアイロニー発話の交互作用がみられ，肯定表現アイロニーの特徴がより表れた。この結果は，肯定表現の場合は肯定的規範は文脈情報として常に存在しているが，それだけではなく聞き手の統制可能な状況あるいは聞き手の明示的先行発話という聞き手が関与する文脈情報が否定的態度の理解には必要であるという仮説（1－b）と一致している。軽蔑性は他の態度と比べてより強い否定的態度である。そのため否定的態度と関連しやすい肯定表現アイロニーにおいて，聞き手の責任（犠牲者）が関与する文脈情報の影響がより明確に表れたと考えられる。

また否定表現でも聞き手の責任と関与する2つの文脈情報が軽蔑的態度の理解を促進したが，特に明示的先行発話でその特徴は顕著であり ($p<.01$)，聞き手の予測失敗につながる明示的先行発話の方が否定的態度の理解により影響を及ぼす文脈情報になるという仮説（2）と一致している。軽蔑性では，適切性などでみられた2種の文脈情報の交互作用はみられなかった。このことは否定表現アイロニーの場合は状況が肯定的であるため，たとえ予測発話が失敗してもすぐには否定的態度には結びつかず，統制可能要因は聞き手の能力評価を強める効果もあるため，軽蔑という聞き手を強く責める態度には影響が現れにくいことを示しているだろう。

以上の結果は，肯定的規範，聞き手の明示的先行発話，聞き手に統制可能な状況という文脈情報をアイロニー発話が利用できる方が，否定的態度側面においてアイロニーと知覚されやすいということを示している。

まとめと今後の課題

本論文では文脈情報の種類を区別してとりあげることで，それらの文脈情報のもつ特徴と，それがアイロニーのさまざまな含意態度の理解にどう影響するかを検討した。

その結果，冗談性以外の態度において，すべての文脈情報要因に主効果がみられ，文脈情報を利用することがアイロニーの理解――特に否定的態度にまつわる――を促進することを示した。さらに，文脈情報要因の交互作用から，否定的態度の知覚に影響を及ぼす文脈情報に含まれている要素として，現状へ聞き手が関与している“責任”の所在という要素があることを明らかにした。そのため聞き手が理解の際に，自身が関与している文脈情報を利用することで，聞き手に責任があるということが活性化され，そのため否定的態度を感じやすくなるのではないかと考えられる。“責任”が存在しない肯定的規範のような文脈情報の場合は伝達される態度は失望というより軽いものにとどまると考えられる。本論文でとりあげた文脈情報の中では，明示的先行発話と統制可能性がその要素を含む要因であり，いずれか最低1つが存在することが否定的態度の知覚の条件として重要であり，文脈情報が多いほど否定的態度を強く感じるというわけでは必ずしもなかった。

この責任という要素は，適切性にも利いてくる強い文

脈情報であるが，軽蔑のようなより強い否定的態度になると，含意される態度が否定的に寄りやすい肯定表現アイロニーにおいて，その効果が顕著に表れた。

本論文では，文脈情報の利用の仕方を明らかにしていく上で，その種類と特徴を区別する必要性を示唆したといえる。今後は文脈情報の種類をさらに考慮しながら関連要因を検討していくことも有用であろう。

否定的態度の表れ方については示唆が得られたが，楽観的態度については十分な見解が得られなかった。それには焦点をあてた犠牲者のタイプも影響を及ぼしているかもしれない。今回は聞き手が犠牲者になる，あるいは犠牲者がいないアイロニーを扱った。そのため非難が生じる場合はそれが聞き手に向けられる状況となるため，冗談という楽観的側面が生じにくかった可能性もある。聞き手以外の，2者間の会話に参加していない別の犠牲者が存在する場合には態度の感じ方が異なって表れてくる可能性も考えられる。含意内容との関連とあわせて，更なる検討が必要だろう。

さらにこれらの要因を踏まえた上で，日常場面でよくおこるアイロニー理解の個人差についての検討を行うことが今後の課題である。

引用文献

ブレイクモア D. 武内道子・山崎英一（訳） 1994 ひとは発話をどう理解するか ひつじ書房 (Blakemore, D. 1992 *Understanding Utterances*. Oxford： Basil Blackwell.)

Grice, H.P. 1975 Logic and conversation. In P.Cole & J.L.Morgan (Eds.), *Syntax and semantics*. Vol.3. *Speech Act*. New York： Academic Press. Pp.41－58.

Jorgensen, J., Miller, G., & Sperber, D. 1984 Test of the mention theory of irony. *Journal of Experimental Psychology： General*, **113,** 112－120.

Kreuz, R., & Glucksberg, S. 1989 How to be sarcastic： The echoic reminder theory of verbal irony. *Journal of Experimental Psychology：General*, **118**, 374－386.

Kumon-Nakamura, S., Glucksberg, S., & Brown, M. 1995 How about another piece of pie： The allusional pretence theory of discourse irony. *Journal of Experimental Psychology： General*, **124**, 3－21.

西谷健次 1993 アイロニーの状況特性と含意 計量国語学，**19**, 117－132.

西谷健次 1996 アイロニーの理解における言及の影響 ―言及理論の妥当性の検討― 心理学研究，**66**, 393－400.

Sperber, D. 1984 Verbal irony： Pretence or echoic mention? *Journal of Experimental Psychology： General*, **113**, 130－136.

Sperber, D., & Wilson, D. 1981 Irony and the use－mention distinction. In P.Cole (Ed.), *Radical pragmatics*. New York： Academic Press. Pp.296－318.

スペルベル D.・ウィルソン D. 内田聖二・中逵俊明・宋南先・田中圭子（訳） 1993 関連性理論―伝達と認知 研究社 (Sperber, D., & Wilson, D. 1986 *Relevance： Communication and cognition*. Oxford： Basil Blackwell.)

内海彰 1997 アイロニーとは何か？－アイロニーの暗黙的提示理論 認知科学，**4**, 99－112.

Wilson, D., & Sperber, D. 1992 On verbal irony. *Lingua*, **87**, 53－76.

付　録

実験で使用した刺激文を以下に示す。(1)～(5)は方法の刺激文に示したストーリー構成に対応している。

なお統制可能性条件ごとに，最初のストーリーのみ肯定，否定表現アイロニー両条件を示し，以降は肯定表現アイロニーの(1)～(4)のストーリー部分のみを示す。

＜統制可能条件＞

部　屋

(1)仁美さんは紀子さんから借りていた本を読み終わったので紀子さんの家まで返しに行くことにしました。

肯定表現アイロニー条件

(2)紀子さんは「私の部屋はいつもきれいに整理してあるわよ」と仁美さんに言っていました。

(3)仁美さんが紀子さんの家に行ってみると，紀子さんの部屋はとても散らかっていてまったく整理がされていませんでした。

(4)仁美さんはその様子を見て言いました。「ほんとにきれいだね」

否定表現アイロニー条件

(2)紀子さんは「私の部屋はちらかっていて全然整理がされてないの」と仁美さんに言っていました。

(3)仁美さんが紀子さんの家に行ってみると，紀子さんの部屋はとてもきれいできちんと整理されていました。

(4)仁美さんはその様子を見て言いました。「ほんとにちらかってるね」

(5)それを聞いて紀子さんは，「それって皮肉？」と聞き返しました。

試　験

洋子さんと和美さんは同じ必修科目の試験を受けました。

洋子さんは「今回のテストは自信があるし，とてもいい点がつくと思うわ。単位も絶対とれてるはずよ」と和美さんに言っていました。

試験の結果が出ると，洋子さんの点は非常に悪くてその科目の単位を落としていました。

その結果を教えてもらった和美さんは言いました。

「ほんといい点だったわねえ」

料　理

幸子さんは広美さんを今度の日曜日に家に招待して手料理をごちそうすることになっていました。

幸子さんは「私は料理がとても得意なの。だから次の日曜を楽しみにしててね」と広美さんに言っていました。

日曜日が来て広美さんは幸子さんの家に行きましたが，出された料理のできは見た目もひどくて，とてもまずそうでした。

広美さんは料理を一目見るなり言いました。

「ほんとにすばらしい料理の腕前ね」

出　席

純子さんと友美さんは同じ科目の授業を登録しました。

純子さんは「私はこの授業にかかさずまじめに出るつもりよ」と友美さんに言っていました。

その授業が始まってみると，純子さんは全然授業に出てきませんでした。

ある日久し振りに授業に出てきた純子さんに友美さんは言いました。

「ほんとにまじめだねえ」

＜統制不可能条件＞

天　気

(1)春子さんと夏美さんは今週の週末に沖縄に旅行に行く計画を前から立てていました。

肯定表現アイロニー条件

(2)春子さんは「今の時期なら台風も来ないだろうし，週末はきっといい天気だと思うわ。毎日海に泳ぎに行こうね」と夏美さんに言っていました。

(3)沖縄についてみるとひどい台風がやってきていて，結局春子さんと夏美さんは一日も海に泳ぎに行けませんでした。

(4)帰りの飛行機の中で夏美さんは言いました。「ほんとにいい天気だったね」

否定表現アイロニー条件

(2)春子さんは「今の時期は台風もよく来るし，週末はきっとひどい天気だと思うわ。海で泳げないだろうから他に遊ぶことを考えておこうね」と夏美さんに言っていました。

(3)沖縄につくと非常にいい天気で，結局春子さんと夏美さんは毎日海に泳ぎに行っていました。

(4)帰りの飛行機の中で夏美さんは言いました。「ほんとにひどい天気だったね」

(5)それを聞いて春子さんは，「それって皮肉？」と聞き返しました。

道　路

恵子さんと由美さんは車でドライブに行くことにしました。

恵子さんは「この時間帯なら道路は空いているはずだから，遅めに出発したらいいと思うわ」と由美さんに言っていました。

ドライブに出発してみると道路はとてもこんでいて車はなかなか前に進まず，予定よりもだいぶ遅れて目的地に到着しました。

目的地に着くなり由美さんは言いました。

「ほんと，空いてたわねえ」

映　画

優子さんと明美さんは映画を観に行くことにしました。

優子さんは「この映画はおもしろいと評判だけどまだ行ってないの。絶対にお勧めだから一緒に行こうよ」と明美さんに言っていました。

映画を観てみると，その映画はとてもつまらなくてひどいものでした。

映画館を出た途端明美さんは言いました。

「ほんとおもしろかったわ」

授　業

綾子さんと真美さんはある授業科目を一緒に登録することにしました。

綾子さんは「この授業は絶対におもしろいだろうから期待してていいと思うよ」と真美さんに言っていました。

実際に授業を受けてみると，その授業は非常に退屈でつまらないものだということがわかりました。

授業を受けながら真美さんは言いました。

「ほんとにおもしろい授業ね」